月が導く異世界道中

Tsukiga Michibiku Isekai Dochu

あずみ圭

Azumi Kei

16

主な登場人物
ライム＝ラテ
クズノハ商会の従業員で
密偵としての顔も持つ。
気配り上手でデキる男。
澪(みお)
元は巨大な蜘蛛。
真と契約して、人の姿を得た。
主の真を喜ばせるため
日々料理の研究に勤しむ。
識(しき)
元は「リッチ」と呼ばれる
骸骨型のアンデッドモンスター。
真と契約したことで
人の姿となった。
真と違って異性から結構モテる。
巴(ともえ)
元は「蜃」と呼ばれた竜。
真と契約したことによって
人の姿を得た。
相変わらず温泉開発に
余念がない。
チャ
リミアの勇者響の
パーティーに同行している
ローレルの巫女。
ちょっと真を怖がっている。
深澄 真(みすみ まこと)
本作の主人公。
親の都合で異世界へ召喚
されちゃった悲運な高校生。
貴族の謀に
巻き込まれがち。

1

――時は少し遡る。

ケリュネオン奥地にある吹雪止まぬ魔の山で、温泉郷が驚愕のスピードで建設されている最中の事だ。

クズノハ商会の幹部である巴は、温泉の工事の進捗を確かめた後、用事を片付けるために席を外した。

彼女の行き先はリミアにある湖。

巴も、そして彼女の主――深澄真も以前訪れた、森の中の静かな湖だった。

名をメイリス湖という。

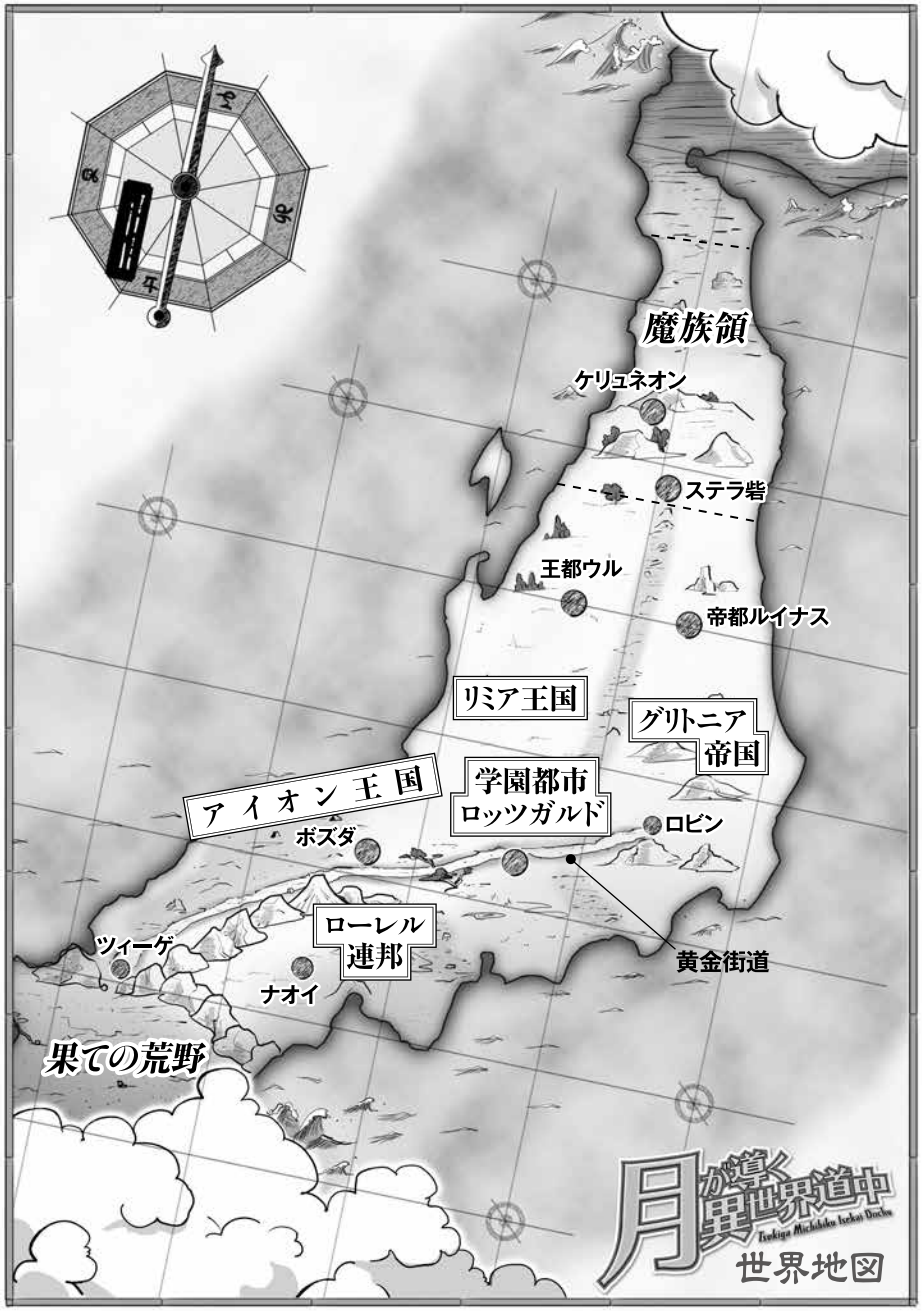
リミアを守護する上位竜リュカが住まう場所だ。

先ほどまでの楽しげな様子など一切感じさせない巴は、腰の刀を抜いて一閃する。

その直後、実に不思議な光景が眼前に現れた。

巴の刀が走った軌跡の部分に目を向けるとメイリス湖の中央に島が見えるが、それ以外のどこから見ても湖に島などない。

再び巴が刀を振るった。



うっすら輝く軌跡は裂け目のように広がり、巴はその中に入っていく。
彼女が中に消えてしばらくすると……裂け目はなくなり、メイリス湖に静寂が戻った。
「流石に自らの領域に侵入されれば警戒はする、か。もっとも、ソフィアとランサー如きにも効果を為さなかったものが儂に通ずる事など、ありえんがな。さて……」
竜殺しソフィアと上位竜ランサー。かつてここでリュカを屠り、その力を奪った者の名だ。
周囲を見渡した巴は、大きく息を吸う。
「リュカーー!! 出て参れー!!」
刀を納めた巴が、大声でこの空間の主である上位竜の名を呼ぶ。
しかし返事はなく、水辺から何者かの気配が現れた。
「む……眷属か。余計な手間を省きとうて、わざわざ大声を出してやったんじゃがなあ」
そこにいたのはゲル状の魔物だった。真がクズノハ商会の代表ライドウとして、リミアの勇者音無響と共にここを訪れた際にも、案内を務めた魔物だ。
「リュカを連れて参れ。上位竜同士の用件ゆえ、眷属の出る幕ではない」
「……」
巴の言葉に反応し、ゲルが不規則に震える。しかし、リュカを呼んでくる気配は見られない。
「やれやれ。面倒だが……仕方あるまいな」
巴は嘆息を一つ。
次いで、刀の柄に手を置き、わずかに目を細める。

直後、小さな竜がふわふわと宙に浮きながら湖面を進んで、巴に近づいて来た。
転生したてのリュカだ。
翼を使っている様子はなく、魔術で飛んでいる。
「何用ですか、蜃――いえ、巴」
「止めに出てくるなら最初から下らん様子見などするな。面倒臭い」
巴はリュカを視界に入れると、刀に手をかけたまま文句を言った。
納刀する気配は、ない。
「無礼な訪問の用件は何か、と私は聞いたのですが？」
「相変わらず、生真面目じゃのう」
「貴方は、随分と変わったようですね。怠惰と気紛れ、惰眠の象徴だった霧の竜とは、とても思えません」
「色々あっての」
「それは興味深いですね」
「……」
「……」
巴とリュカの間に不穏な空気が流れる。
「さて、用件じゃったな。リュカ、どういう理由かは知らぬがお前、以前の記憶を持っておるな？」
「……何を根拠に言っているのか。我ら上位竜の中でも記憶を保ったまま転生する秘儀を有してい

るのは、白の砂漠にいるグロントだけですよ、巴」
「うむ。じゃからルトと儂も安心しておった。ソフィアなんぞにやられおったお前達じゃが、まあ何事もなく転生して新たに生きておればそれでよいとな。気にも留めておらなんだよ」
巴の言葉からは、彼女と〝万色〟の上位竜ルトが今回の転生の件で何やら動いているという事が窺え、リュカはわずかに警戒を強めた。
彼女から見て、今回のルトの暴走は度が過ぎている。極めて危険な兆しだ。
「ならば問題ないでしょう。眷属の者達から聞かされましたが、あの者に敗れた事は確かに不覚。謗りも甘んじて受けましょう」
「……じゃがのう、リュカ。ちと気になる事があって〝夜纏〟――ドマの奴の卵から記憶を読んでみたら、しっかりソフィアに殺された記憶を残しておってのう」
巴の言葉を受け、リュカの口元がわずかに歪む。
「っ。かつてない事態ですね。そのような能力のない彼が前の記憶を残して転生するなど」
「アズマも生まれたばかりじゃったが、確かめたところ記憶を保っておった。ならばお前だけがいつも通りの転生をしたと考えるのは不自然じゃな、リュカ？」
〝夜纏〟ドマ、〝紅璃〟アズマ、そして〝瀑布〟リュカ……いずれも一度ソフィアに討たれて転生した上位竜である。
「巴、いい加減になさい。たとえ前の記憶を持っていたとしても、それが貴方の来訪にどう影響するというのですか」

「そうでなくば、お前の若――我が主への警戒が説明できんのじゃよ。今、儂に記憶を見せまいと防いでおる理由もな」
「ライドウへの警戒？　一体何を」
「若の記憶の中で、お前は若を明らかに過剰に警戒しておった。分からんか？　それが、〝儂がアズマとドマの記憶を調べる切っ掛け〟なんじゃよ。全てはお前の態度から生まれた疑問よ」
静かに言葉を続ける巴。
一方、リュカは巴が口にした〝若の記憶の中で〟という言葉に、明らかに驚きを示した。しかしその変化はすぐに消え、表情に自信が戻る。
「ふふっ、若の記憶？　ライドウに支配される身である貴方が、主である彼の記憶など見られるわけがないでしょう。ハッタリはやめなさい」
「……儂らの関係は少々特殊でな？　若は儂に惜しげもなく記憶を晒してくださるのじゃ。まあ、ここまで話をしている時点で最早確認の意味もない、か」
二人の間に流れる空気がわずかに変わる。
否、巴が変えた。
「記憶を、他者に惜しげもなく見せる？　そんな馬鹿なヒトがいるわけがありません。それに私が見た限り、ライドウは他人に記憶を覗かれる事をよしとする精神を有してはいません」
「ふっ、お前に若の何が分かるか。あの二人を見て、それでも響に期待するような者に理解できようはずがない」

主の、ライドウの記憶を見なければ口にできないはずの言葉が次々に巴から出てくる事実に、リュカがたじろぐ。
「……まさか、本当に従者に記憶を見せる主人など、そんな馬鹿げた存在が」
リュカは主人と言ったが、ヒューマンや人間に限らずある程度の知性を持っている種族の個であれば、他者に――しかも従僕としている存在に、記憶を見られる事をよしとするわけがない。
少なくともリュカはそう思っている。
だからこそ信じられなかった。
しかし事実、巴はまるでライドウと自分の会話を見てきたように知っている。
リュカとしては、ライドウ個人にさほどの警戒心を抱かせたつもりはない。アレは腹芸を得意とする人物ではないし、客観的に体験を話す特技なども持ち合わせていないはずだ。
はず、ハズ、筈。
リュカは自身が願望を前提として思考している事に気付く。
巴が言っているように、ライドウが記憶を晒しているという説明が一番しっくりと来る――そんな恐ろしい事実にも。
「誤算じゃったなあ。裏で動くつもりが、あっさりと露見してしまった。リュカ、もう分かっておろうな？　儂の目的はお前の命、じゃよ」
「上位竜同士が殺しあう？　ライドウにそこまで狂わされましたか、巴」
リュカの言葉に、巴は喉元で笑う。

彼女には珍しい獰猛な笑いだった。
「かもしれんのう。あの方は実に麻薬じみた魅力をお持ちじゃ」
「どう考えても、その言葉が当てはまるのは勇者のいずれかであると思いますが？」
「誰の目にも良いもの、大勢から賞賛を受ける者はその実、誰一人熱狂させる事ができぬ、とも考えられる。より最大公約数を求めた結果は無難なものにまとまる事もある。その反例としての考え方かもしれんがな。うちの若は万人受けはせんが、ほんの一部の者を魂の底から熱狂させる、そういう方なんじゃよ」
「私にはその魅力がまるで分かりませんでしたね」
「じゃろうな。だから響と組んだ。そうじゃろ？　若を秘蔵の書庫に入れ、胡散臭い召喚儀式など紹介したのも、お前が若を警戒し、恐れるがゆえ。さっさとこの世界から若を消したかったか？」
「あくまで儀式は、彼の望むものかと思ったのですがね……」
「否定はせん。じゃがあの儀式、随分と癖がある様子。分析は済んでおらんが、まともな儀式ではなかろう。よくもまあ得体の知れんモノを若に持たせてくれたものよ」
「私も詳細までは知りませんでしたよ。ただ、代償を払えば召喚された者を確実に元の世界に帰す儀式として収録されたものに間違いありません」
「……ふん。まあ、それはお前に聞かずともよいわ。転生したばかりのお前らには悪いが……もう一度転生してもらうぞ。この上裏でこそこそする輩が増えては目障りで仕方ない」
「私の領域に単身やってきてその言葉を吐くとは、少々正気を疑いますね、巴。私も貴方も、己の

領域ではおよそ敗北はありえ……ら？　お前ら、ですって？　まさか貴方」
「アズマは儂、ドマはルトが……じゃがな。とりあえず今度の転生では、記憶は引き継がれておらん。前回は死に方がイレギュラーじゃったから、と儂らは見ておる」
「よくも平然と……ライドウが女神以上にこの世界にとって危険だと、こんな簡単な事さえ分かりませんか、ルトも、貴方も」
巴は無言で太刀をリュカに向ける。
一気に空気が張り詰めていく。
「私の領域で亜空は展開させませんよ。ソフィアの時の不覚は繰り返しません」
「哀れじゃなあ。亜空など、元々使う気はないわ。残念じゃが、儂と今のお前では勝負も成立せん。こんなもの、不愉快な雑事でしかないわ」
そう言うなり、巴は魔力を纏うリュカとは異なる方向に刀を振るった。
その一撃で、巴に攻撃を仕掛けたゲルが、真っ二つになる。
音もなく、素早いモーションの変化だったにもかかわらず、巴は視線を逸らす事なくそれを――獲物を捕食する瞬間のクリオネに酷似した姿に変わったゲルを、斬って捨てた。
以前の、力任せに刀を扱っていた巴の姿はもうない。
少なくとも刀の扱いを知っている体運びだった。
開戦だ。
「この！」

リュカの声に反応して、湖から輝く水柱が無数に立ち上る。己が構成する空間で、しかも得意な属性の術ともなれば、リュカには詠唱など不要だった。
渦巻く多数の水柱が自在にうねって多彩な軌道を描き、巴に襲い掛かる。
無詠唱による威力の減衰など、欠片も見えない。
しかし、巴は微塵も焦った様子はなくその状況を見つめ――何を考えたのか、刀を鞘に収めた。
「耐性があるから耐えられるとでも!?」
「……」
巴はそのまま動く事すらなく、次々に水柱に貫かれていく。
宙に持ち上げられた彼女はそこでも荒れ狂う水に襲われていた。
「っ!?」
その光景を見ていたリュカが、突然息を呑む。
無理もない。
いきなり目の前から何もかもが消え去ったのだ。
リュカが湖の水で大技を放つその直前まで、時間が巻き戻ったかのように。
――ただ、巴の姿はあるべき場所になかった。一瞬でそれに気付いたリュカが、彼女の姿を追う。
「遅いのう」
「ば、かなっ」
上空から聞こえた声に、リュカは思わず呻く。

しかし、適切な対処ができない。
上から降ってくる巴は、既に腰の刀に手をかけた後だった。
まるで間に合わない。
「――っ」
目に追えぬ高速の斬撃。
巴が最近励(はげ)んでいる居合(いあ)いの太刀だ。
やや高く浮いた自分の体を上から下に通り過ぎていく巴の姿が、リュカにはいやにゆっくりと感じられた。
そしてまた、巴を見失う。
湖面に落ちた音も、様子もなかった。
何をされたのかいま一つ分からぬ混乱の中、リュカは全方位に攻撃を仕掛け、どこかに確実にいる巴を退(ひ)かせようと試みる。
互いに能力は知っているはずの相手との戦いだというのに、巴の手が全く分からず、リュカは焦っていた。
恐怖もまた彼女の裡(うち)に生まれていたが、自分ではまだ気づいていない。
「アズマもそうじゃったが、やはり弱い」
「蜃、そこにっ!?」
リュカはつい、かつての名で巴を呼び、次いで己の身に起きた事を知った。

視界がゆっくりと変わっていく。
原因が、首を刎(は)ねられたからだと気付いた時にはもちろん手遅れで――
リュカの頭が静かに湖に落ちていった。
「もう終わりかの」
「……まさか」
巴の問いに答え、リュカの頭が言葉を紡(つむ)ぐ。
一瞬で湖面が凍りつき、少し遅れてふわりと湖面に降りた胴体が、氷の上に転がった己の頭を手にした。
「まるでアンデッドじゃな」
巴は驚きもせず、頭を元の位置に戻して繋(つな)げるリュカを見て苦笑した。
「この場で戦う以上、この程度の状況は読んでいたでしょうに」
「無論じゃ。逆にお主は儂の手の内がまるで読めんようじゃがな」
「……確かに。戦士として戦うかと思えば術を用い、そして防ぐでも食らうでもないあのやりよう……幻術ですか」
「その通り」
「幻術と分かれば、対処など容易(たやす)い。幻と分かる幻に意味などありませんよ？」
「さて、どうかのう。どこまで幻術であったかも見切れないそのザマでは、な」
巴は腰を落とし、突然その場で居合いを放った。

遠目でも辛うじて抜き手が追えるだけの凄まじい速さに、リュカが表情を硬くする。
「なんの真似です？」
「すぐに分かる」
「……不愉かっ、あ？」
突然、リュカは肩口に鋭い熱さを覚えた。
視界が真っ赤に染まる。
吹き上げた血のせいだ。
誰の？
言うまでもなく、リュカ自身のものだ。
斬られた。
彼女がその事実に気付くまでに数秒を要した。
「儂の手下に持たせた刀には〝マーキング〟という能力があってな。条件を満たした相手なら、距離も射程も無視して自在に斬れる。……もっとも、魔力の消費も馬鹿にならんが、それでも刀一本でやっていくつもりなら有用じゃ。面白そうじゃったから、儂の刀にも付与させた」
「まるで曲芸ですね」
リュカの傷が瞬く間に癒えていく。ここは彼女の支配する——全てを最も優位に展開させられるはずの場所。
事実、首を刎ねられても、あからさまな重傷を負わされても、彼女はそのダメージに動じてい

ない。
しかし、痛みを感じていないのは巴の妙技の副作用、というわけではない。リュカは上位竜きっての回復魔術の使い手だ。
「治癒の術、回復にかけては上位竜でも並ぶものがいない、か。名も腕も一応は錆び付いてはおらんな」
「こんな攻撃で、私を殺せると？」
「ほんの試し斬りと、儂の修業の成果を確かめたかっただけじゃよ。もう、終いにしよう」
言うが早いか、巴の姿が合わせ鏡のように増えていく。地の利などまるで無視した巴の暴力が加速していく。
横一列に並んだ全ての巴が、静かに詠唱を始めた。
「また幻術ですか！　何をする気かは知りませんが、やらせません！」
リュカは増えた巴を次々に魔術で消していく。
しかし、消したそばから巴の姿はさらに増えていき、まるで状況が変化しない。
「ここまで大規模の幻術など、どうしてここで！　……まさか、気付かぬうちに亜空に引き込まれているとでも……」
「そのような姑息な真似はせん」
「そこですか！」
リュカは巴の声がした方向に、即座に高めた力を乗せて全力のブレスを見舞う。

以前、魔族領でルトが放ったそれと比べると微々たる威力だが、小さな体から撃たれたものとしては相当なブレスだった。
図体だけの中位竜レベルなら一瞬で氷塵となって消し飛んでいただろう。
リュカのブレスは巴を捉えたように見え――しかし急速に薄れて消え去った。
当然、巴は無事だ。
「一体、貴方は何を仕掛けているのですか……」
「恐らくは覚えている事もかなわぬじゃろうが……有幻無実。それがお前を殺した術じゃ」
「殺した？　何を」
「これで、気付けるか？」
巴がリュカに腕を向けると、風が吹いた。
なんの魔力も籠もっていない、正真正銘、ただの風だった。
「風？　これで何が――!?」
「……」
「体が、霧に!?」
「夢幻と現とは、果たしてどこにその境界線があるんじゃろうなあ」
巴が独り言めいた呟きをこぼした。
風に流されるまま、リュカの体が少しずつ薄れ、手足、翼から崩れて消えていく。
リュカがそう感じた通り、風に押し流される霧、それに映った幻を見ているかの如き、奇妙な光

景だった。
「幻術などで！」
リュカは今起こっている事象を即座に幻と断じた。
打ち払おうと術を展開したものの、状況は何も変わらなかった。
魔術が発動すらしない。おかしい。
「無駄じゃ。己自身が一瞬でもそう疑ってしまった時、お前のその身は真の幻と成り果てた。最早消えゆくのみ、じゃよ」
「他者を幻に変える術など、そんなものが、そんな力が」
明らかに上位竜すら超え、世の理を逸脱した能力だ。
「ならば、攻撃を幻にするのは認めるのか？　まあ、好きに解釈せい。頭だけになっても恐怖に顔を歪めぬのは立派じゃったぞ」
「待ちなさい、どこに行くのですか！」
「終わったでな、お主より余程大事な〝温泉〟が待っとる。それに、夕食に遅れては若にいらぬ心配をさせるしのう。お前や他の上位竜などの事で、あの方の心を乱しとうない」
「蜃、巴！　ま、て……」
死ぬ。
リュカは確信した。
幻術がどうこうどころか、どのような技をいつ食らったのかも分からないが、このままではあと

十秒もしないうちに死ぬ。
「ではまたな、リュカ」
「まっ……て……」
リュカの姿が掻き消え――なかった。
「!?」
一閃。
鳴き声に似た独特の響きを伴った矢が、背を向けた巴とリュカの間を貫いた。
矢はそのまま湖の中に消えていく。
前に亜空で面白がって試作された音の出る破魔矢、破魔鏑矢のそれに酷似した音であった事に気付いた巴が、はっとして振り返る。
矢の影響は覿面だった。
いつの間にか、巴はリュカの住まう裏世界のメイリス湖から表の世界に戻ってきていた。
一方、リュカはと言えば、消えていった時の逆再生で体が無事に再生している。
間違いなく、生きていた。
巴は一瞬苦渋に満ちた表情を浮かべ、そして大きく溜息を吐く。
「参りましたな、若。儂のやりそうな事などお見通し、というわけですか？」
巴が相応の数を始末したので、流石に眷属は目減りしていたものの、リュカ自身は生きていた。
今、巴は確かに感じる主の気配に動けずにいる。

リュカもまた動けない。
もしも巴の言う通りライドウの介入があったとしたなら、自身の敵意も彼に知られている事になる。
ライドウは一旦生かした相手であっても、必要とあれば〝殺しなおす〟のを厭わない。
リュカの中で、彼は相当容赦のない存在として認識されていた。ソフィアの顛末を間近で見ていたのだから、ある程度偏った印象になるのは無理もないが。
そして……その場にはもう、何一つ動くものはなく。
元々静かだったとはいえ、あまりにも不自然な、完全な静寂が一帯を支配していた。
そんな中――
「いや、偶然。ちょっとリミア絡みで面倒になりそうで、巴を探してたら、何故かリュカを成敗するとこだった」
自然な仕草で湖畔に現れたのは、巴の主にして騒動の元凶ともいえる男、ライドウ。
散歩途中ですと言われても信じてしまいそうなほど、平常運転の彼だった。
「そのままでお待ちいただければ、一件落着でしたのに」
「なんか斬り捨て御免な空気を感じたんだよ。それにリミアの件だって言ったろ？　力を貸してもらう事だってあるかもしれないじゃないか」
「あぁ……そういえば仰ってましたな、霧の沼地だとか。ナイト、風呂と樽？」
「!?」

巴の口から忌まわしい土地の名に近い響きが出た時、一瞬リュカの全身が強張る。
「違うわ！　ナイトフロンタルだ！」
「精霊の死骸でできた霧なぞ気味が悪い。まとめて消し飛ばしてさっさと戻ってこられたらよろしい」
「そうもいかないよ。響先輩と少し口喧嘩もしちゃったし、ホープレイズさんのところは間接的に息子さんを死なせてるし」
「……どちらも若が気に病む事ではありませんぞ？　些事です些事」
「頼むよ、巴。召喚魔術で上位精霊を呼んでもおかしくないような演出と、魔力の量。相談に乗ってくれ」
「儂には温泉があるんですが。最速で混浴――いえ、皆の日々の疲れを癒したいと、全身全霊なんですが」
「その分、お前には記憶もばんばん見せてるでしょ？　ほら、働く働く」
「……うむ～、若にそこまで言われては否とは申せません。リュカ、命拾いしたの？」
不服の感情を視線でリュカにぶつける巴を、真が窘める。
「獰猛な目で元同僚を睨むな！　んじゃ、リュカさん、すみませんがこれで失礼します。近々少しお願い事で伺うかもしれません。よろしくお願いします」
「あ、ええ……その、こちらこそ助かりました？　ええっと……」
「いえいえいえいえ、では～」

色々と誤魔化すように、胡散臭い〝いえいえ〟を残して……ライドウは巴と共に霧の門に消える。
湖に残されたのはリュカ一人。
しかし、決して前の彼女ではなかった。
明らかに桁の違う力を巴に見せつけられた。
勇者響を推すという選択に後悔はない。
だが。
リュカの心中に疑念が生まれる。
事はもう手遅れなのではなかろうか、と。
ライドウは近々また来ると言う。
恐らく、ナイトフロンタルで何かやらかすのだろう。
一体自分は何を求められるのか。
結果としてはクズノハ商会に殺されかけ、クズノハ商会に救われるという、マッチポンプ以外何者でもないやり方で命の恩人となったライドウの求めとは。陰鬱な思いにげんなりしながら、リュカは自らの住まいに戻っていくのだった。

――一方。
真の相談に乗り終えた巴は、ケリュネオンに戻って存分に温泉への情熱を燃やした。
彼女は、いつものように皆と夕食をとり、何事もなく一日を過ごしたのだった。

2

クズノハ商会の代表としてリミア王国を訪問していた僕――深澄真は、かの国の大貴族アルグリオ＝ホープレイズ氏の依頼を受け、ナイトフロンタルという厄介な湿地帯の調査をしていた。
湿地内にあるボロ小屋を改修（ほぼ新築）して拠点を確保した僕達調査隊だったが、そこで謎の黒い霧に〝皆殺し〟宣告をされ、脱出不可能な状況に陥ってしまう。
まさに秘境探検的展開です。
とはいえ、僕や従者の澪は霧の門で簡単に行き来できるんだけど。
そんなわけで、亜空やら何やらで所用を済ませて、コテージに戻ってきた僕。
絶体絶命の状況で拠点を長く空けてしまった事を、調査隊の面々が不審に思うといけないので、留守にした表向きの理由は考えてある。
でも、僕らが選んだのは、やはり力業だった。
流石に調査だけじゃあ弱いし、後々誤解もされそう。
だってさ、僕には突然綿密な計画を練るのは無理だし、もっともらしい理由付けで説得できる言い訳なんて思い付かんですよ。
それに、ナイトフロンタルに来てからの経験で、こういう時はでっかくぶち上げる方が意外とバ

レないもんだと学んだ。
「改めて、戻るのが遅れてすみませんでした。調査と並行して、こちらも協力者を用意すべきと思いまして……実はそちらの準備も進めていたんです」
ちょっと前にこの環境に〝ちょうど良い存在〟と知り合いになっていたのを思い出した僕、グッジョブだ。
僕は調査隊の面々に声をかけ、拠点として急遽エルドワことエルダードワーフ達に造ってもらったコテージから皆を連れ出す。
この場にいる人の中でクズノハ商会関係者は、僕と澪、そして従業員のライム＝ラテだ。
それ以外の面子は、ローレルの巫女チヤさん、エンブレイ商会のルーグさん、リミアの貴族ジョイ＝ユネスティ、そして不運にもこの場に居合わせる事になった荷運び兼、下働きの奴隷の三名。この三人の内訳は、女性一名男性二名、まだ若くて歳も近そう。
一度はかなりナーバスになった彼らだったけど、美味い飯と十分な睡眠、そして個別の面談で多少は親しくなったのが効いているのか、今は大分落ち着いてくれている。
パニックを起こさせないのが緊急事態での死者を減らす一番の方法だと思うので、これはありがたい。
聞き上手のライムを連れてきていて本当に良かった。
もちろん、事態が長引けば、また精神も不安定になるだろう。
でも僕はそこまで状況を引っ張るつもりはなかった。

いつまでもこんな所で足踏みしているわけにもいかないから。
「協力者と言われましても、今ここに助けに来られる方がいるとは思えぬのですが」
僕の釈明に口を挟んだのはルーグさんだ。
しかしこれが彼一人の意見でない事は明らかで、そうだそうだと肯定する視線がグサグサ刺さってくる。
「やりようは色々ですよ。世の中には召喚という技があります。冒険者や城仕えの方には使い手もいるかと思いますが」
「召喚、もちろん知ってます。……使えるんですか？」
そう言いながら、ローレルの巫女様、チヤさんが僕らを見る。
正確には澪を見ていた。
僕とライムには彼女の視線は向いてない。
心眼とかいう特殊なスキルで澪の正体――黒蜘蛛を見たようだから、蜘蛛の眷属を呼び出すと思っているのかも。
あまり歓迎している口調じゃないもんな。
ライムも苦笑してる。
「はい、使うのは澪と僕で」
「あの……ライドウ殿は召喚魔術も使うんですか？」
ジョイさんが呆れを含んだ声で疑問を発した。

失礼な――いや、こういう展開は前もあったな。
確か……そうだ。
ロッツガルド学園で僕が受け持っている講義の最中。
生徒のジン達の鍛錬相手にミスティオリザードを召喚した時に、似たような事を叫ばれたんだった。
召喚が（疑似的に）使えると言ったら、あいつら、召喚〝も〟じゃねえかとか、それはもう失礼に。
果ての荒野じゃなくても危ない土地に向かう事もあるだろうし、商人が魔術や体術を嗜んでいてもなんの問題もないと思うんだ。
それに、体術や武術と違って、魔術は魔道具の類で補強する事も容易いんだからさ。
まあ、今回は魔道具を理由にする手は使わないんだけど。
……あ、よく考えたらその手もあったか。
魔族のところには竜を召喚する道具だってあったんだから、僕もそれに倣えば良かった。
しくじったな。
「偶然教えてくれる方が近くにいまして。同じ説明をするのは何度目かになるやもしれませんが、これでも僕は荒野を駆ける商人ですから」
「は、はあ。荒野という所だと商人ですら魔術の一つや二つ使えないと通用しないのですか」
僕の説明を聞いても、ジョイさんはまだ釈然としない様子だ。

「……ジョイさん」
「え？」
「どこに身を置こうと、最終的に自分の身を守れるのは自分だけです。体と魔術を鍛えて損をする事などありません」
「……」
おっと、つい本音が。
ジョイさん黙っちゃったよ。
そんな彼に代わって、ルーグさんが応える。
「ですな。かといって、商人に召喚魔術が要求される場面など私は知りませんし、商人や貴族には武技や魔術よりも優先すべき取得スキルが多々あるのも事実ですが。時間は無限ではありませんから」
おおう、辛辣。
「ケ、ケースバイケースですよね、はは」
「しかし現状、それが我々の光になるからこそ、ライドウ殿と澪殿はその準備をしてくださった。ならば、文句よりも期待と沈黙こそが正解でした。つい下らぬ口を挟みました、申し訳ありません」
ルーグさんが頭を下げる。
いや、時間は有限って考えは大事だ。ジョイさんは領主だし、身につけるべき事は尽きない。戦

士や魔術師の真似事に傾倒するのは良くないよな。僕の失言だったかもしれない。
まあ、皆の疑問に順番に答えるより、やってしまった方が早い。
といっても、他の――チーム奴隷の皆さんは、外の雰囲気にビビりながらも、何か言う気配はない。
彼らは彼らでナイトフロンタル以外の問題を抱えているみたいだけれど、ルーグさんが機会を与え、彼ら自身がチャンスを掴んでここにいる以上、僕らができる事は知れてる。
おし、じゃあやるか。
僕は召喚をもっともらしく見せる演出を始める。
なんで大量の魔力を放出しながら派手な魔法陣を出現させるだけの魔術なんて、頑張って作っちゃったかね。
本当に、らしい魔道具にすれば良かった。
「澪、それじゃあ頼む」
メインの詠唱は澪。
そして僕は彼女をサポートする雰囲気で、魔術の詠唱を始める。
まず僕と澪の周辺に小さな魔法陣が複数立ち上がった。
次に、足元に僕らとここにいる全員を範囲に入れてなお余裕があるサイズの魔法陣が出現する。
詠唱を続けて、大小の魔法陣から徐々に魔力放出の量を増加させていく。
その光景を目の当たりにしたジョイさんとルーグさんが、良い感じに慄いてくれる。

「私などでも尋常でない魔力だと分かる魔術だなんて……なかなかお目にかかれない光景ですね」
「一つの召喚魔術というよりも、これは最早儀式魔術に近いナニカのようです。ジョイ殿どころか、そこの奴隷達ですら脅威を感じている。彼らが魔力だと分かっているかどうかまではさておき」
ルーグさんの言葉通り、奴隷の皆さんは身を寄せ合ってガタガタ震えていた。
ふむ、魔力感知なんて縁がない人達でもこの様子だと……少し抑えた方がいいな。
ぶっ倒れてもらっても困る。
次の段階での魔力増大は抑えるように、澪に目配せする。
彼女は何故か嬉しそうに、でも小さく頷く。
途中、何かあっても、流石に巫女さんや貴族、豪商を差し置いて奴隷を守るわけにはいかない。
従って、ライムの護衛優先対象は変えられない。
「こんな規模の召喚魔術、王国でも連邦でも見た事ない。でも、これ、まさか」
チヤさんも良い感じだ。
僕は土と火しか知らないけど、あいつらの雰囲気には共通点あったもんな。
水の巫女であるチヤさんには、こういう方向で驚いてもらった方がよろしい。
一通り皆の反応を確かめた僕は、召喚演出を次の段階に進める。
自転しながら公転する魔法陣を空中に四つほど出し、あえてバラバラな角度に配置して、動いてもらう。
注文通り、澪の方も魔力増大は抑えめ、ありがとう。

僕達の周囲は霧に包まれながらも、魔法陣の光によって暖色系の柔らかい明るさで満ちている。
驚愕の表情を浮かべたチヤさんが、うわごとのように呟く。
「嘘、ダメ……魔力は足りていても贄がいないのに……ありえない！」
クライマックスのタイミングは良きところで、澪にお任せ。
「おいでませ」
澪の直感なら、最高の一瞬を逃さないはず……って澪それだけ⁉
シンプルすぎ！
「わ、我らの親しき友よ、助力を願い、う！」
付け足したけど、適当すぎてすまん！
「はうっ」
澪が何やらショックを受けてるし！
これまた悲しそうな顔を……あーもう、こっちもごめんて！
そんな僕らをよそに、鮮烈な赤と、オレンジに近い黄色の光が周囲一帯に満ちていく。
「あ、ああ……！」
チヤさんにはもう、ナニが来るか予想できているみたいだ。
しかし、贄とは。
ローレルでは〝彼ら〟を呼び出す際に生贄を要求されるんだろうか。
魔族の都市の神殿に祀られていたものは、特に手間もかからない感じだった気がする。ちょっと

驚きだな。
お、来るね。
魔力の流れが生む特殊な風が巻き起こり、光が炸裂した。
一瞬視界がゼロになる。
そして、周辺の霧も薙ぎ払って見晴らしがよくなった僕らの前に現れたのは……柔らかな光を纏った大きな牛と鳥。
割とでかかった。
魔族の所で戦った時と同じ――いや、あの時よりは気持ち小さいかな。
てっきり、大きさはある程度変えられると思っていたんだけど、無理なのか？
サイズ感がよく分からなかったから、チヤさん達の目の前に召喚するんじゃなくて、彼女達を僕らの後ろに控えさせておいたのは正解だった。
「……よく来てくれた。僕らはとても困っている、助力を頼みたい」
「若様をお手伝いできるなんて、光栄に――」
いつもの調子で呼びかける澪を慌てて制止する。
「澪、ストップ」
「あう」
ごめん。
でも、ここでいきなりその台詞はまずいよ。

「また、とんでもない所に喚んでくれたものだな」
超牛の方が話しかけてきた。
めっちゃマッチョな牛の体に、変に凶暴な角が生えたこいつはベヒモス。土の精霊ではトップらしい。
若干嫌そうだけど、その場で膝を折り、伏せっぽいポーズをしている。
牛とか馬だと、これがお座り的な感じなんだろうか。
「この状況に無関係ってわけでもないだろ？　ま、それは僕もかもしれないけど……」
「……確かに。借りもある事だ、協力は惜しまんよ」
彼が口にした〝借り〟は、どちらかと言えば僕の従者の元リッチ――識に対してのものだろう。
でも、契約の場には僕もいたし、識と僕の関係は分かっているからか、こちらの言葉にも耳を傾けてくれている。
精霊の墓場だっていうなら、上位精霊に掃除させればいいじゃない。
二属性ほど心当たりあるし？
ってなもんですよ。
隣では、鳥の方も、澪に話しかけている。
「関係……水と土のが恨みを買っているようですけれど。犠牲になっているのは、属性を問わず。場所がリミアともなれば、通常あまり介入はできませんが、召喚ならば仕方ありませんね。ええ、喜んで協力させてもらいましょう」

内容を聞く限り問題なしだ。
そしたらこいつらを前面に出して〝精霊加工装置〟になっているナニカのところまで、さくさくっと進ませてもらおうじゃないか。
「フェニックス、お前達の不祥事に若様が巻き込まれたんです。半日で片付けなさい」
「澪、貴方はまた無茶苦茶の化身のままですね……」
「ふん。竜の縄張りで暴れて良いって言ってるんですから、喜びなさいな」
「……別に、普段奴らのご機嫌を伺って遠慮している事など何もありませんよ？」
少し辺りが暖かくなってきたような。
「なら、こんな精霊捨て場みたいなところを放置するんじゃありませんよ、醜悪な」
「確かに気分の良い場所じゃないですね。本当に、もう風のも水のも、何をしているのだか、ふふふ」
気のせいじゃなく、暑いな。
フェニックスの仕業か。
「あー、澪と盛り上がるのはいいんだが、発熱？　は抑えてくれるとありがたいな、フェニックス」
「……ライドウ」
「あら、呼び捨て？　ナニサマかしら、あの時の状況を盛大に朗読したくなりますわー」
フェニックスの態度に不快感を示す澪を、小声で宥める。

「澪、話進まないから」
「いえ、確かに呼び捨ては礼を失していましたね。ライドウ殿、此度の事は精霊の不始末。ナイトフロンタルに呼んでもらえて感謝しております」
「……あ、まあ、あまり気分の良い所じゃないだろうね。そこはすまない」
「ああ、嫌味などではありませんよ。リュカがうるさくてそう簡単に手を出せもせず、歯痒く思っていたところです。貴方からの召喚ならば、遠慮なく振舞える。だから本当に感謝しています。私に関しては、借りが増えたとさえ思っていますよ」
横で話を聞いていたベヒモスが、頷いて同意を示す。
「む、俺とて、言葉のアヤというやつだ。ここに干渉できるなら俺も気持ちは同じだとも」
そうなんかい。
ベヒモスさんよ、さっきは完全に借りを返す的な感じだったよ、あんた。
それとも、フェニックスのこの言動も、澪が引き出してくれたんだろうか。
僕としては、今回協力してくれたら別に貸しとか借りとかはどうでもよかったんだけど。
上位精霊ともなれば、女神との関わりだって良くも悪くも濃密。
個々の人格と気が合ったところで、状況次第では真っ向から敵対する可能性がある関係には変わりないんだし、仲良しごっこも申し訳ないんだよな。
いつの間にか、じっとりとした暑さはすっかりなくなっていた。
「ところで二人とも、せめて普通の牛と鳥サイズにはなれない？」

大きいって事は良い事だ、と誰かが言ったらしい。
でも、今は邪魔だ。
できれば小型サイズになってほしい。
「なれる」
「なれますよ」
なら、最初からそれで来てほしかった。
前もってリハーサルしとけばよかったか？
「じゃ頼むよ。ベヒモスの方は多少大きくてもいいや。疲れた人を乗せてもらいたいし」
「乗せ……」
「ぷっ、もはや農耕牛なみの扱いですね」
絶句するベヒモスを見て、フェニックスが噴き出した。
「フェニックスは熱くならないように気をつけてね。基本的には澪の肩にいてくれる？　止まり木のがよかったら、ライムに適当なのを探してもらうけど……」
先ほどの意趣返しとばかりに、ベヒモスがからかう。
「お前もほぼペット扱いだぞ、フェニックス」
「……なに、ここで力を見せて認識を変えさせればよろ、よろしいのです」
「動揺しているな」
「うるさい」

うん、精霊同士も仲が良いみたいで安心した。
「というわけで、土の精霊ベヒモスと火の精霊フェニックスです。多分、余程酷い事をしなければ皆さんに危害は加えませんのでご安、心、を……？」
とりあえず、精霊と意思確認もできたから、じゃあ皆に紹介を、と振り返った僕が見たものはひれ伏す民だった。
なんか静かだな、とは思ってたんだ。
チヤさんどころかルーグさんやジョイさん、チーム奴隷も、全員が服も汚れるだろうに沼に手をついて膝をついて、平伏していた。
ライムは立っていたけど、苦笑交じりに頭をかいている。
「えーっと」
「何しているんです、貴方達。立ちなさいな、話が進まないでしょう」
澪が呼びかけるが、体がそのまま石化したみたいに皆動かない。
参ったな。
僕らの中では一番怖がられている様子の澪の言葉でも、微動だにしないとは。
「チヤさーん……」
呆然としていたチヤさんが、僕の声に反応して我に返る。
「無理、無理です、ライドウさん。この……方々は、女神様の眷属にして世界を見守る上位精霊様に相違ありません」

「ええ、上位精霊です。でも今はこの通り、僕らの協力者として来てくれているんですから」
「生贄もなしに、ほんの数日の準備だけで召喚していい――できていいわけがない方々なんです!!
皆さんの様子をご覧になれば分かるでしょう!? 私がさせているんじゃありません。自身の内から自然と湧き出てくる感情に従っているんです。……頭を垂れ、跪くべき相手だと、この身の全てが悟っているんです！」
……そんな事を言われてもな。
泣きそうになりながら訴えられても、むしろ僕が困る。
特におかしなスキルの発動なんかは把握してないんだけど。
一応、澪に確認してみるが、想像通り彼女も首を横に振る。
うん、魅了みたいな精神に干渉するスキルは使われていない。
「ライム、悪いけど皆を立たせて。これじゃロクに紹介もできやしない。それから、ベヒにフェニ、お前らも威圧とかするなよ？ 水の精霊を信仰している巫女さんはともかく、商人とか貴族まで土下座しちゃってるでしょうよ」
「む、特に何もしてないが」
「心外ですね、ライドウ殿。私達は他のよりは余程親しみをもって人と付き合っています」
「もういっそ、ぬいぐるみみたいになれませんの？ それなら土下座する者もいなくなるでしょうに」
ぬいぐるみか。

原形が原形だけにゲームのマスコットキャラクターじみた姿しか想像できないな。
でも確かに頭を下げる感じではなくなる、かな。
僕と澪が精霊と雑談する中、ライムが一人ずつ軽く説得しながら立ち上がらせていく。
「う、うぅ……」
「あぁ……」
ジョイさんとルーグさんは精霊の存在を目の当たりにして、まともな言葉を発せずにいる。
既に荷物らしい荷物もなくなった荷運び担当の奴隷達は顔面蒼白で、わなわなと生気なく震えている有様。
チヤさんは直立不動、合掌して祈りのポーズだ。
精霊への祈りって、仏教スタイルなのか。
……そういえば、神道の参拝って合掌するのかしないのか、どっちが正当なんだろうな。
思い切って何度か神職の方々に伺ってみたけど、皆祈る気持ちを重視していて、合掌の是非はどちらでもよいというスタイルだった。
あ、それを言うならこないだ本物の神様に会えたんだし、どっちが良いんでしょうって、それこそ思い切って聞いておけばよかったじゃないか……。
「己の矮小さが身に染みて分かりました」
「私も、ただこうせねばならないという衝動に突き動かされ、気付けば平伏していました」
ジョイさんとルーグさんが呆然と感想を呟いた。

「そりゃ、強い精霊には違いないです。ただですね、見ての通り僕らが召喚したんですから、そこまで緊張しないでください」
『……』
ベヒモスもフェニックスも沈黙したまま状況を見守っている。
いや、周囲の把握に努めている感じだな。
ここは精霊にとっても関心を寄せるだけの場所だって事だ。
僕としてはこんなホラーハウス、さっさと終わらせて帰りたい気持ちでいっぱいだけどね。
沼系ホラーアトラクションとか、勘弁だよ。
「ローレル連邦では、水の上位精霊様を顕現させるのは国家が数年単位で準備を進め、時の巫女を犠牲にしてようやく成立する一大事なのに。個人でそれを可能にするだなんて……」
緊張から少し解放されたらしいチヤさんが、今度はえらく複雑な表情で僕と澪、そしてベヒモスとフェニックスを交互に見ては、深呼吸している。
「水の巫女よ、それは単純に我らが求めるものと顕現の方法によります」
「左様。我らは同じく上位精霊としてこの世の事象を司りはする。しかしそれぞれ個として別に存在し、嗜好もそれぞれに異なる。水の上位精霊ウィナルデは特に信仰心を好む。女神の模倣でもしている気なのか、な。ゆえに、魔力よりも想いを好むのだ。たとえばわざわざ器として不十分なモノに受肉するような顕現方法を選ぶ、とかだな」
……へえ。

精霊にも好みや自我はそれなりにあるんだな。
水の精霊は信仰心を好む、と。
だから宗教みたいになっているのか。
確かに、水以外の精霊の場合、精霊神殿なんてあんまり見た事がないし、世界規模に広がっているものは存在しない。
もっとも、女神への信仰がその代わりになっているのかもしれないけど。
「フェニックス様……ベヒモス様……」
ベヒの言葉を継いで、フェニがチヤさんを慰めはじめる。
「――だから水の巫女よ、今回の我々との邂逅を理不尽に思う事はありません」
「ああ。汝も感じたように、馬鹿げた魔力を垂れ流して上位精霊を無理やり召喚するなど、恐らくコヤツら以外にできもせん。だから気にするな。汝の精霊への畏敬、信仰は、我らも快く感じておるよ」
「まったくです。たまにはアレも巫女の体など使わずに単身で魔力のみでの召喚に応じればよいのです」
「完全に同意するよ」
精霊達の話を聞く限り、ローレルでは水の上位精霊を呼ぶイコール当代の巫女が死ぬ事なのか。
性悪そうな印象だな、水の上位精霊。
女神に近い性格ではなかろうか。

しかし……もしチヤさんの犠牲が精霊降臨の条件だとしたら、ローレルの重鎮である中宮の彩律さんは絶対に首を縦に振らないだろう。
あの人が早くから魔族との戦争に対して積極的に支援し、チヤさんの事でリミアとの関係がこじれてもなおその基本方針を変えなかった理由。それは、戦局が悪くなって、精霊に顕現してもらおうという話が現実的にならないようにしたかったから？
なんとなく、僕には彩律さんがそう思っている気がする。
彼女は巫女という立場だけじゃなく、チヤさんに入れ込んでいる風に見えた。
「で、お前らはどうなんだ？」
僕の質問が唐突すぎたのか、フェニックスとベヒモスが怪訝そうな表情を浮かべた。
「なんですか、唐突に」
「そうだぞ、ライドウ――殿。いきなりなんだ？」
「精霊の嗜好ってやつ。水の精霊は信仰心なんだろう？　じゃあ土と火のお前らはって話」
「似たようなものです。私は勇気が好きですね。精霊は皆強い感情を好むのですよ」
「だな。俺は揺らがぬ信念を好む。ただ一つ、己が決めた道を征く。俺にとってそんな人の生き様は最高の肴だ」
勇気に信念。
大して変わらないな……と思った。
現にこいつらは魔族にも力を貸しているし、性格もある程度似ているのかも。

しかしベヒモス、肴ってさ。
酒のつまみにするみたいでどうかと思う。
「強い感情か。ちなみに風の精霊は？」
『……』
気になって聞いてみたら、何故か突然沈黙する上位精霊ズ。
「？」
『……』
「ど、どうかした？」
再度問うと、渋々といった様子でベヒモスが口を開いた。
「あいつだけは特殊でな」
「はい。風の上位精霊は、本人曰くセンスを好みます」
「せんす？」
「ええ。美的感覚というか、洒落た仕草とか。正直、理解できませんが」
美的感覚、オシャレ？
……。
うん、僕にも理解不能だな。
感情の強弱関係ないじゃんか。
ただ、信仰といいセンスといい、水と風の精霊の嗜好は、土と火よりだいぶ女神寄りだな。

立ち読みサンプル
はここまで

「加護を与える条件は気紛れですし、特定の国や人に肩入れもしません。ある意味究極の個人主義とも言えますが、私が思うに、あれはヒューマンにも亜人にもさして興味がないのではないかと」
「同感だ。有事となれば女神の手足として動きはするだろう。しかし誰かに、どこかに肩入れするなど、恐らく今後もせんだろう」
「なるほどねえ」
さて、そろそろ皆の気持ちも落ち着いてきた頃だろう。
雑談はこの辺にして、攻略に移ろうじゃないか……と思って次の話題を振ろうとしたが、上位精霊達の話は終わってなかったらしく、二人はそのまま喋り続ける。
「……というわけでだ」
「というわけですから」
「？」
ベヒモスとフェニックスが、立ち上がったチヤさん達に対して、厳かに、かつ優しく語りかける。
「かような精霊も絶えた地に、無力ながら足を踏み入れたヒューマン達よ」
「死をも覚悟してなお、何かを求め、足を踏み出した勇者達よ」
「我、大地を司りし精霊ベヒモスは、汝らの行いを称賛する」
「私、炎を司りし精霊フェニックスは貴方達の勇気を讃えます」
『……！』
なんだなんだ？